

## 『ゆけむり史学』第八号の刊行に寄せて

田村 憲美

もうだいぶ前のことになるけれども、学部学生だったころ、日本中世史の専門書や論文をいくつか読み始めたときに、気がついたことがある。それはこれらの研究で言及される地名や人名などの固有名詞の多くが、高等学校の教科書などには決して出てこないということだ。このことは私にとっては新鮮な感動だったと思う。それら地名や人名は当時にあってもいわば片田舎の在所、全国的には、いや地方的にも無名の人々であった。

たまたま縁あって文書や帳簿に記載され、それが現在まで伝えられて、史料として読まれるようになったために、これらの名前が現代にまで知られている。そればかりか、その在所の自然環境や政治情勢、その人々の行動や主張、ある場合にはものの考え方や感じ方でさえ、近いものとなっているのである。現代の歴史研究者は、このようにたまたま残された土地や人々をなるとだけ誠意をもって理解することを通じて、全体の歴史を表出してきた。

歴史に名を刻むということは、結局このようなことではないか。そうすると現在生きている私たちも、強いて未来に残る事業を成し遂げようとか、榮譽を追究しようとか考える必要などないのかもしれない。未来の歴史研究者たちが、現代では夢想すらできないようなものを史料化する方法論と理論、比較にならないような精緻・

高度な分析の技術を駆使するようになっていくことを、私は疑わない。「日本」や「中世」あるいはそのほか現在用いられている理解の枠組みを、彼らはもう用いてはいない可能性は大きいし、問題関心もまったく異なっているに違いない。だとしても彼らの視野には、必ず現代の私たちが日常・普段に行っている暮らしが、どのように大きな歴史の動きを形成したかが、場合によっては固有名詞を伴って、入っていることだろう。未来の歴史研究者たちが誠意ある仕事をすれば、私たちは日々をまっとうに送るだけで、歴史に(たぶん)名を刻みうるであろう。毎日呑気に暮らすことだけを肯定しているわけではないけれども、そのように思う。

未来の歴史研究者の誠意に期待するためには、現代の歴史研究者は最低限、誠意を研究の伝統にしておかなければならない。そうすれば歴史学の枠組みがどのように変化しても大丈夫であろう。大学はその伝統の受け渡しをする場所かと考えている。

今年度も『ゆけむり史学』が刊行されることになった。この号は今年度の大学院歴史学専攻の在学生が少ないこともあって、ほとんど学生全員が編集世話人と寄稿者とを勤めることになったようである。また、各方面で活躍中の修了生の方々のご協力もいただいたことか。有難いことである。

この冊子が、あらためて未来の歴史学に伝統を手渡す一助になることを願っている。